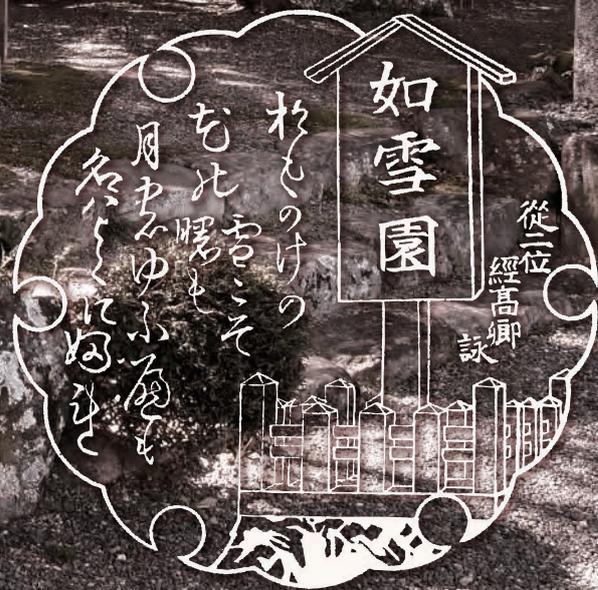


伊勢神宮崇敬会だより

みもすそ

特集
如雪園



お伊勢さんの歳時記

- 1月1日 歳旦祭
- 1月3日 元始祭
- 1月7日 昭和天皇祭遙拝
- 1月8日 大麻暦奉製始祭
- 1月11日 一月十一日御饗
- 1月31日 大祓
- 2月11日 建国記念祭
- 2月17日 祈年祭
- 2月23日 大麻麻暦頒布終了祭
- 3月5日 春季皇霊祭遙拝
- 3月21日 御園祭

内宮を流れる五十鈴川は、倭姫命が御裳を濯がれたことから「御裳濯川」(みもすそがわ)とも雅称されます。題字は本会会長の松下正幸による浄書。表紙は、神宮ばら園(旧如雪園)内の碑林と如雪園のスタンプ。

如雪園今昔

昭和10年代の絵はがきと、現在の姿を比べてみました。



正門 / 坂道の左手に神宮会館本館が、坂の上には大講堂が建ちました。門柱のような自然石が、往時とほぼ同じ位置に立っています。



休憩所 / かつて休憩所だった建物はなく、緩い坂道を登った所に神宮相撲場が建てられています。桜並木だった所には大講堂が。



貴賓館 / 茅葺きだった貴賓館は銅板葺きとなりましたが、ばら園の休憩所としてかつての面影をとどめています。



神宮会館の建つ一帯はもともと内宮禰宜・中川経高の山荘があったところで「如雪園」と呼ばれ、桜の名所でした。神宮崇敬会では現在、神宮の外苑としてかつての風情を取り戻す試みを始めています。

特集 如雪園

神宮会館の裏手、緑陰にこんな歌碑が立っているのをご存じでしょうか。

おもかげの雪こそ花の曙も
月の夕へも名は世々にふれ

江戸時代、内宮の禰宜を務めていた中川経高が詠んだもの。当館が建つ一帯は、もともと経高の山荘があったところで、その庭園には雪が降る如く花が咲き乱れていたとの伝えから「如雪園」と呼ばれていました。

今号では、神宮の外苑として多くの参拝者を迎えてきた如雪園の今昔をご紹介します。

参宮者の休憩所として

如雪園が開拓されたのは大正九年（一九二〇）のこと。大阪の篤志家・帯谷傳三郎が、神宮参拝者の敬神・尊皇を思い、巨費を投じて無料休憩所を設置したのがはじまりです。

園の広さは約八〇〇坪。高台から五十鈴川の清流と、遠くに神路島路の山々



昨年3月19日に行われた植樹祭。松下会長、亀田少宮司、高城理事長（右から上の写真も）。

を望む絶景の地で、神宮や神道に関する講演会、林間学校等も行われました。皇族方のご来園も多かったようで、当時の栄華が偲べれます。

経高が詠んだ歌のとおり、如雪園は全山が桜に彩られた花の名所でもありました。毎年春になると大勢の花見客で賑わったといえます。

昭和十年代につくられた如雪園の絵はがきがあります。桜並木の正門、桜の木の下の休憩所：どれも現在は見る事ができません。

如雪園が当初の面影を失ったきっかけは、昭和二十七年に「神宮崇敬者参宿所」が建設されたから。敗戦によって神宮の存続を危惧した崇敬者たちの志により設立された「伊勢神宮奉賛会（当会のみ母体）」は、全国から伊勢へ訪れる参宮者の便宜を図ろうと、当地に専用の宿泊施設を建て、一帯を整備したのです。

園主・伊藤傳七翁とは

前出の絵はがきは、たとう紙に包まれており、表面には如雪園の所在地や面積、昭和十年度の登園者統計数など。裏面には「如雪園事業概要」として設立趣旨等と、園主として伊藤傳七翁の名が記されています。

当時の面積は一三五〇〇坪で、登園者数は一七五、七八〇人。小中学生や軍人が過半数を占めています。

園主の伊藤傳七（第十一世・一八七八～一九六〇）は四日市市出身の実業家第十世伊藤傳七です（襲名制）。伊藤家はもともと四日市で質商、米穀仲買、清酒醸造業などを営んできた名家。幕藩時代には土地の代官所の財政を預かり、苗字帯刀を許された実力者でした。紡績業に目を付けたのは九世で、十世は渋沢栄一の援助を受けて大成。紡績業のほか、各種工業、交通運輸、農事、教育にも尽力しました。四日市南部の西日野にある四郷郷土資料館（旧四郷村役場）は、十世が寄贈したものです。

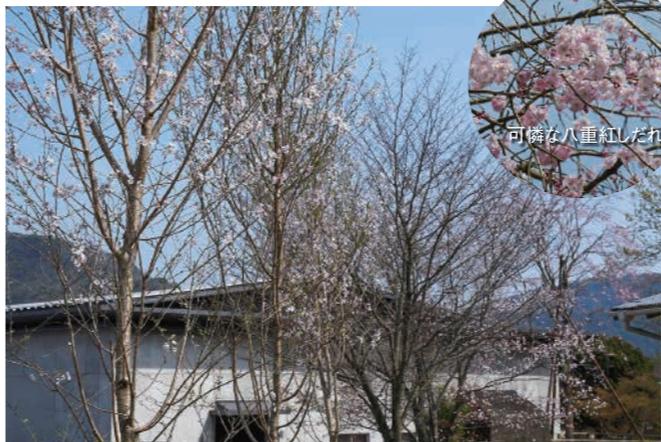
そんな父を見て育った十一世もやはり実業家としての才を発揮しました。三重県北部を走る三岐鉄道を創立し、大正期には志摩電気鉄道（近鉄志摩線の前身）の初代社長にも就任。地域の教育や文化産業の発展にも力を注いだといわれています。神宮崇敬の念も篤かったことから園主に抜擢されたのでしょう。



伊藤家の旧別邸(国の登録有形文化財)は、料亭「伝七郎神楽」として営業されている。四日市市高砂町6-12



雪の如く花が咲き乱れる往時の姿を追い求めて



昨春植樹された桜の木も花を咲かせた。今春はより多くの花で彩られることだろう。



ばら園の一角に設けられた「碑林」。右から、経高脚歌碑、守武句碑、如雪園碑。

バラと桜が彩る園に

赤、白、ピンク、黄、オレンジ…。如雪園の貴賓館周辺に「神宮ばら園」が開かれたのは昭和六十二年（一九八七）のこと。三重県ばら会会長からバラの苗を献納されたことがきっかけで、神宮のお膝元に花の名所を復活させ、参拝者に目の保養をしていたらこうと造られました。

開園当初は五十七種、三百株が植えられ、現在は百三十種、五百株が咲き乱れて、春と秋の二シーズンには市内外から多くの来園者が訪れます。

特に人気が高いのはプリンセス・ミチコ、マサコ、アイコなど高貴な名が冠されたプリンセス・ローズで、当園ならではの見どころとなっています。来春、新たにプリンセス・ナガコが加わります。

平成八年（一九九六）、内宮ご鎮座二千年を記念した奉祝行事が伊勢市をあげて行われた折、本会は奉祝事業として如雪園に桜の苗木を植樹しました。

また平成十九年には、開園二十周年を記念してばら園の一角に「碑林」を設けました。冒頭にあげた中川経高の歌碑や、如雪園の雅名を刻んだ石碑、俳祖・荒木田守武が詠んだ「元日や神代のことも思はるる」の句碑など、花陰に埋もれていた石碑をひとつところに集めたのです。バラの盛りには緑陰の休憩所として、花のない季節にも如雪園の由緒に親しんでいただけます。



春と秋の見頃に公開され、大勢の観覧者が訪れる「神宮ばら園」。ばら展も開かれる。

昨年からは如雪園のおもかげを取り戻す復興事業がスタート。春には本会松下会長、亀田神宮少宮司、高城理事長らが参加して植樹祭が営まれ、桜や広葉樹を多種植えるなど、花の名所づくりに取り組んでいます。これからの如雪園の歩みに、ぜひご期待ください。

次頁では、造園に携わっていただいているウス井樹園さんのインタビューをご紹介します。

人工的な景観ではなく もとからあったような自然な庭を つくりたいと思っています

有限会社 ウス井樹園

三重県津市の「ウス井樹園」さんは、昭和四十六年から造園業を始められ、世界祝祭博覧会（まつり博・三重'94）や伊勢志摩サミットのメディアセンターなど、大規模な造園の設計・施工に取り組まれています。

当会では平成二十九年から如雪園の復興事業に携わっていただき、現在は第二期工事の最中です。

「きっかけは、伊勢神宮崇敬会の高城理事長が、せんぐう館での私どもの仕事を覚えていくくださったことから。いわれのある松の木を移植し、命をつないだのを当時少宮司だった高城さんが目に留めてくださった、神宮徴古館の周辺環境整備（倭姫文化の森）に際してもお声掛けくださいました。そんなご縁から今回も『如雪園の桜がなかなか花を咲かせない』とご相談をいただき、お手伝いさせていただくことになりました」（薄井哲代表）



左から、代表取締役の薄井哲さん、薄井成夫さん、薄井美弥さん。

如雪園をふたたび花の名所に！。

伊勢神宮崇敬会では、会の設立六十五周年に向け、初心に立ち返る事業を始動させました。しかし、当時の絵はがきには桜が写っているものの、ほかにどんな木がどのように配置されていたのか、確たる資料はありません。ご子息で設計担当の薄井

成夫さんは「白い花が咲き乱れ、まるで雪のよう」という経高の歌を頼りに、植樹する木を選定していったと言います。

「今回は大講堂裏手と相撲場の周囲に、桜を主体にコブシなど全部で二十本を植樹しました。気候風土に合うよう三重県の木が主ですが、遠く

は群馬から運んできた枝垂れ桜や、神代曙、舞姫など神宮さまのおそばにふさわしいという理由で選んだ桜もあります。早咲きの河津桜から里桜まで、長くお花見を楽しんでいただけだと思います」

日本では桜というとソメイヨシノが一般的ですが、野生種や園芸品種を合わせると約五百〜六百品種も存在するとか。同品種を一カ所に寄せるのではなく、山里に桜が点在するような自然な風景をめざしているそうです。

春の神宮奉納大相撲の頃には美しい桜が訪れる人々の目を楽しませてくれることでしょう。



上／植樹祭の設え
左／倭姫文化の森

